

# お春

東京女子高等師範學校教授

岡田美津

## 八虹の橋

幸兵衛は、臺所の窓際の卓で淋しく夕飯を食べてゐた。彼の妻……「母や」と幸兵衛はいつも呼んでゐるのだが……は近所の病人を看病しに行つてゐた。

雨は未だ降つてゐた、五時頃になるかならぬのに空は暗かつた。

茶を飲みながら幸兵衛が顔を上げると開いた戸口に、世にも悲しげな子供の姿が見えた。

お春はあまりに眼を泣き腫らし、悲しさをあり／＼と面に浮べてゐたので、爺さんは、一寸の間お春だと心付があつた。

「おちさん、入つてもよいの。」

といふ、お春の聲を聞いて、爺さんは、勢よく、

「やれまあ、あの馬車の御婦人客だつたかい。おちさんどこへ遊びに来さツしやつたんだね。やあ、ぶぶ濡れぢやないか。火の傍へ來さつしやい。暑いけれどな、夕飯のものを暖めやうと思つて、火起したんだ。『母や』が居あいで、ちいとばかり淋しいだ。『母や』は、今夜、節藏さんの看病しについてゐる。さ、その傘のたれる帽子を、釘へ掛けてお、椅子の横木に上衣を引かけて、火の方へ背を向け

て、よろしく身体を干しなせい。』

幸兵衛は、いちごきにか、澤山、物を言つた事はなかつたのだが、お春の赤い眼と涙に汚れた頬をちらと見たので、如何して泣いたんだか理由はとにかく、無上に同情したわけなのであつた。

お春は、爺さんが再び席につくまで、暫く黙つてゐたが、我慢がしきれなくなつて、せわしく言つた『おちさん。私伯母さんの家を逃げ出して來たの。私田舎の家へ歸りたいわ。おちさん、今夜私を泊めてそして錦ヶ森まで馬車で連れていつて頂戴な。私、馬車賃を持つてゐるけれど、將來にどうかして儲けるから。』

『ま、馬車賃の事なんか、お前とおらの間だから、かれこれ言ふまいよ。まだ二人で一所に出掛けなかつたワあ……始終行かうくッて話してゐながら。河下へだよ……上の方であく』。

『もう、私富田町も見られないわね。』とお春は啜り泣いた。

『どうしたんだのこゝへ來ておちさんに話してごらん。』と爺さんは賺した『その腰掛に座つて、すつかり話してきかせあせい。』

お春は、爺さんの手織の着物の膝に、悩む頭を載せて一五一什を話した。感情の強い、経験のないお春の心には、今日の出來事は、たまらなく悲しい事件であつたが、それでも、此兒は詐らず、誇大せず話した。

幸兵衛は、お春が話してゐる中、咳をこたりモチモチ動いたりしてゐたが、度外れの同情をしないやうにと心を配つて、

『可愛想に、どうかしてやらう』  
と口の内でくどくど言つてゐた。

「ね、おちさん。私を錦が森へ乗せていつて頂戴ね」

とお春は、おさげなさうに頼んだ。

幸兵衛は、内心すこし企みがあつたので、

「ちつとも心配することはねい。おらの馬車の御客さんだ。まつと引受けた！、さ何ぞ食べたらい、パンにそのトマトのジャムを付けてごらん。卓のそこへ来て、「母や」の代りにあつて、おちさんにもう一杯茶をついでくれないか。」

幸兵衛の心の機械は簡單で、愛情とか思ひ遣りとかに押されなければ、クル／＼早く廻らなかつた。

今の場合、幸ひ、愛情と思ひ遣りと都合よく働いてくれたのであつたが、爺さんは、自分の頭の鈍いのを歎き、どうぞいゝ思付きが浮んで欲しいと祈りながら、やみくもに車を運んでいつて見た。

お春は、爺さんの優しい聲音こゝろがねに慰められ、主婦の位地に座る偉まぢさを怖る／＼悦んで、にこりとして髪の毛をかき上げたり涙を拭いたりした。

「お前のお母さまは、お前が歸つたら、さぞ喜ばなさるだらうか」と爺さんは尋ねた。

さうきかれてみると、ちよつとした心配がほんの一寸したのが……お春の心の奥に芽を出してそれがだん／＼成長して來た。

「逃げ出したのを、母さんはいやがるでせう。おみね伯母さんの機嫌を取れなかつたツて残念がるわ。

でも私、母さんが合點するやうに話すの。おちさんも解つてくれたものね。」

「きつと、お前のお母さまが、お前を此地へよこしたのは、學校の事を考へあすつたらう。だがあ、畑ヶ谷の學校へ行けばいゝんだらうて。」

「畑ヶ谷には、短期學校があるツきり、あとの學校へは皆遠くて駄目なの。」

「でもな、世の中は」があくもんに「いや限らねいや」と爺さんは林檎のバイを食べながら答へた、  
「さう……ね。でも、母さんは、學校へやつて私を、ものにする氣だツたのよ。」とお春は、お茶を飲ま  
うとしたが一じやくり一寸泣いた。

「田舎で家族揃つて暮らすもいゝな……子供が大勢居てよ。」と優しい爺さんは、お春を抱きよせて可愛  
がつてやりたい程に思ひながら、口ではさう言つてゐた。

「あんまり大勢すぎるの……それが厄介なのよ。私、お花姉さんを代りに河崎によこさう。」  
「伯母さん達が承知するかね。しめいとおら思ふよ。お前が歸つてしまつたツて、腹ア立つことだらう  
腹あ立つのも無理やねいからあ。」

お春が、無情の伯母の家を逃げ出したために、お花姉さんも來るわけに行かない……といふのは  
お春の思ひ付かあかつた事だつた。

「この河崎の學校はどんなだね……なかくいゝのかへ。」と爺さんは尋ねた。爺さんは我ながら驚く  
ほど頭腦が敏速に働くのであつた。

「え、いゝ學校よ！、そして寺岡先生ツて立派な先生よ。」

「その先生を好きかい。先生の方でもさうあんだらう。うちの「母や」が、先刻、節藏さんの膏藥を買ひ  
にいつた時に、橋の上で寺岡先生に御目にかつたんだと。そして學校の話が出たんだ……」母や」は  
小學校の先生達を下宿させた事があつて、先生達を好きあもんで、畑ヶ谷から來た子供はどうですつ  
て「母や」がきいたところ、あ、あの子は學校中で一ですツて、寺岡さんが言ひなすつて「生徒がみんな  
近藤春子のやうなら、朝から晩まで教へてゐられるツてあ。」

「あら、ほんと、おちさんと。」お春は、上氣したやうにあつた……その顔は忽ち光るばかりに冴々とあ

り笑みこぼれて『私一生懸命やつたのよ。でも、もつとくこれからじやう。』

『もし此地に居ればッていふ事あんだろ。』と爺さんが口を挟んだ。『おみね伯母さんのために、そんな事も、みんな、廢めちまふなあ、惜しいもんでねいか。おら、御前を咎めるんでねい。あの人ア、氣狂染みてゐてそして意地が悪いんだ。きつと、澁柿でも食ッて育つたんだろよ。こつちで余ッ程、辛抱しさい事にやとでも、お前さも、あんまり堪忍強い方ぢやあるめい、え。』

『え。』とお春は、陰氣に答へた。

『もしお』と爺さんは續けた『昨日此話が出たんだとすると、おら、また別の考持つたらうが、何しろ今どなツちや間に合はぬい。おら、御前がどこまでも悪るいんだッていふぢやねい、だがな、こうならぬい前の話にしていへばだ。いゝか、お前の伯母さんが、食べさせて、着せて、その上に學校へやつて、將來いまに倉山の女學校へ大金かけて出してやろうツて言ふんだ。あの伯母さんて人は、一所に暮くららしい人であ、恩に被せたがつて……だが、恩は恩だ……お前の方で優よくしくして、ま、その恩の返しをするのが本當だらうな。よねさんの方がちいどまじだろ。それともやつぱり氣むづかしいかね。』

『あのおよね伯母さんと私は仲よしおのよ。』とお春は勢いきこんで話し出した『もう、それや親切で優しいの。私だんくあの伯母あん好きになる。伯母さんも。私が好きなんでせうよ。一べん私の髪かみを撫なでてくれたわ。あの伯母さんにあら一日叱なられてゐてもよい。解とつてくれるから。だけど、おみね伯母さんの前ぢや、私の肩を持つてくれないの、私みたやうに、おみね伯母さんを怖おそがつてるんですの。』

『よねさんは、お前さんが去いつてしまつたのを知つたら、明日さぞ方を落とすだらう。だが、もう仕方がねい……おみねが口喧くちやかましくて、一所に居ても面白おもしろくねいとあると、およねさあは、お前さん

が居るのを楽しみにしてゐたらうにあ。うちの「母や」がこの間の晩、祈禱會のあとで、およねさんと話したつて言つてたツけ「今の家は、もとのやうぢやない、私裁縫のお師匠さんを始めたところかね、たつた一人ある御弟子がもう三枚着物を拵へましたよ、子もない年寄りにしちや、大出来でせう、私これから日曜學校の組を一つ預つて、お春と一所に遠足にいつたりして、少し若返へるつもりです」  
てツおよねさんが話したつたと。母やの話に、およねさんは若くなつたツて

すると臺所の中は森としてしまつた。背の高い柱時計の音とお春の胸のドキ／＼するする音とだけ。お春には、時計の音も自分の胸の鼓で打消されるかと思はれた。雨が止んで、薄桃色の光りが臺所に一杯に入つて来た。窓から見ると、虹が、天の端から端へ七彩の橋を架けてゐた。お春は考へた。橋は越せまいところを渡してくれるものだが、幸兵衛おぢさんが、丁度橋を架けてくれて、今の難儀を越さしてくれるんだと。

爺さんは、煙草を填めながら、

「夕立が上つたね。空気がきれいにあつたし、地面も何もかもきれいにあつた。明日、お前さんと、河上の方へ馬車で行くといろんなものが清潔だらうよ。」

お春は茶碗を押しやつて立ち上がり、靜かに帽子と上衣を著はじめた。

「おぢさん、私河上の方へ乗つて行かないわ。私此所にゐるの………そして叱られてゐるわ。怒らまいで叱られて置くの………こんな逃げ出したりしたから、おみね伯母さんが家へ入れてくれるかどうか分らないけれど、私この元氣のあるうちに行くの、おぢさん、一所に行つて下さらない。後生だから。」

「よし来たおぢさんは、この事件が無事に片がつくまで、お前の傍を離れるこつちやない。大丈夫、請

合つた。』

と爺さんは嬉しさに怒鳴り立てた。『もう、今夜は、お前さ、すいぶん辛い目見てゐる。可愛さうにな、病氣にもなりかねない。それにたみねさ、きつと、機嫌わるくしてゐて理屈言つたツて、聞き入れるどこちやあるめい。でだ、おらの考はかうだ。お前さを馬車へ乗せて煉瓦の家まで行くんだ………隅ンどこへ知れぬいやうに乗せて………そしてあ、おらが降りて横手の入口へ行つて、みねさとよねさどを物置へ連れ出して、この二三日中に、する約束してある薪の事の相談おツ始める。その間にお前さ、馬車からソツと出て二階の室へいつてしまふんだ。表玄関の戸は緊りがしてあるまい。』

『夜でも今頃はまだしまつてない。』とお春は答へたが『おみね伯母さんが床へ入るまでは開いてるのよでも………もし、しまつてゐたら如何じやう』

『何、しまつてやしまい。もししまつてゐたら、仕方がない。表向きに大びらにやるまでだ。だが本當は大びらにやらずに、こつそりした方がいゝ事も世の中には、澤山あるんだ。いゝかね。お前さは、まだ逃げたんでないよ。逃げようと思ふがツて、おらのそこへ相談に來ただけなんだ。それであ逃げる程の事もあるめいと二人で定めたんだ。いゝか。お前のした悪い事ツていふのは、おらの考へるところとちや、寢てゐると言はれたのに、窓から脱げてこゝへ出て來たところにあるんだ。それだつてさう極悪いンでもないから、こんどの日曜あたりに、よねさの心がじんみりしてゐる時、話してごらん………そしたら、たみねさにも白状した方がいゝとか何とか教へてくれるだらう………、さ、おいでませい。郵便局へ行かうと思つて、馬車の支度は、すつかり出來てるんだ。風呂敷包を忘れなさんか。』寢衣をもつて出ると、それは旅行よ母さん』とお前さが言つたツけ。あれが、おちさんがお前さの物言ふのを聞いた始めだ。お前さんがおらの家へ寢衣を持つて來ようとは思はなかつた、さ中へ入つて

隅ンどこにちいさくあつておいで。逃亡したとこを他に見られたらいけない……新規蒔直しをしに  
戻るンだからな。』

お春はそツと二階へ上つて暗がり衣着物を着換へて床に入つた時、身体は疲れ痛んでゐたが、穏やかな心持が、次第々々に胸に擴がつていつた。とんだ失策をするところをしないですみ、母親に心配もかけず、伯母達を怒らせたり恥をかゝせたりもしないで済んだのを嬉しく思つた。今は、お春の心も解けてどんな骨折をしても、おみね伯母さんの歡心を得ようと決心した。(つゞく)